

英雄主義への弁明 —信仰を求める随筆—

ムルク・ラージ・アーナンド*
小西真弓訳

I

私はインドの古代において人をバラモン（司祭）、クシュトリア（戦士）、ヴァイシャ（商人）、シュードラ（奴隷）という四つに分けた階層の上から2番目に当たる、クシュトリアのカーストに属するヒンドゥー教徒の家庭に生まれた。ヒンドゥー教というものが、長い年月の間に、統一的な宗教という概念を希薄化して、カーストによる社会組織になってきたことはあまり知られていない。また最近では、近代産業とそれに付随する社会的及び政治的な思想・制度の到来によってカーストの階層も瓦解してきている。そのため、私は混沌とした世界で育ち、矛盾というものを幼い時から感じ取ってきた。

私は幼い頃に、母が祭りとなると必ずヒンドゥーの英雄的な男神・女神の小さな真鍮製の像を、どこからか拾ってきた十字架や、アーガー・ハーンとシーク教の元祖であるグル・ナーナクの絵と共に、礼拝用の特別な台の上に隣同士に並べていたことを、よく覚えている。私には、それがいつも大そう奇妙に感じられた。そのためか、母から宗教について多くを学んだとは思っていない。実際に母がどの宗教についても、ヒンドゥー教の伝統的な儀式に関してさえも、あまりよく知っていたとは考えられない。確かに母は、父を通して、ヒンドゥーの祈りの本である『バガヴァッド・ギータ』(Bhagavad-Gita) を読んで教訓を得てはいたが、私たちにとってそれは娯楽の域を超えないものにすぎなかった。『ギータ』を読む母を真似してのけるという素晴らしい演技の褒美として、父や客から輝く銀のコインをもらったことが私にはよく思い出される。振り返ってみれば、母は単に訳の分からない言葉や、礼拝の中で司祭が聖水をふりかけたり香をたくことに愛着を感じていただけかもしれない。その間、父や兄たち、私とえば、母を見ながら笑い、儀式が終わって果物やお菓子、その他の供え物を母が分けてくれるのをひたすら待っていたものであった。時折、私たちが一揃えの像のことで冗談を言うと、神々や信仰の背後には唯一の神がいると母は言っていたが、それでも彼女の多神教崇拝は不確かで信頼できるものではなかった。

父のそういった信仰に対する態度と言えば、伝統的な信条と、イギリス支配下のインド軍

* 本抄訳は、Mulk Raj Anand, *Apology for Heroism: An Essay in Search of Faith* (London: Lindsay Drummond, 1946) の第1章から第5章を翻訳したものである。

で過ごした世俗の生き方との間で譲歩したものであった。父は、ヒンドゥー文化の下に生まれ、その文化に協調しながらも、銅細工師、銀細工師であった祖先から、一風変わったイスマール教に一族の者として専念することを受け継いだ。これは、現アーガー・ハーンの祖父にあたる人物がイスラム教とヒンドゥー教を組み合わせて作り上げた信仰で、自らを預言者モハメッドの直系の子孫であると断言する一方で、ヴィシュヌとクリシュナというヒンドゥーの神の生まれ変わりでもあると主張する信仰であった。

父はインド軍へ入隊し、銅細工師、銀細工師の仲間と離れ、ある程度の教育を受けた職業人やビジネスマンと共に北インドの野営地で暮らすようになって間もなく、アーガー・ハーンという生き神に対して抱く自らの信仰に関して、人目を気にし始めるようになっていた。アーガー・ハーンは、当時でさえ、ヨーロッパの国々の首都やリビエラ海岸地方での贅沢な暮らしに巨額の金を使うことで知られていた。彼は競走馬の種馬を囲いながら、「神であるなら、飲んだり遊んだりの楽しみとは無縁である」と宣言するという奇妙な類の生き神だった。

このアーガー・ハーン信仰に対する反動として、父はアーリヤ・サマージに加わった。これはダヤナンド・サラスワティ (Dayanand Saraswati) という名の、グジャラート州のバラモンによって始まったヒンドゥーの改革主義運動であって、古代のヴェーダ信仰の復活と、未亡人の再婚や女子の結婚を承諾できる年齢の引き上げ、特にイスラム教からの改宗だが、他の信仰からの改宗といったような社会改革を融合させたものであった。運動全体は、近年のヒンドゥー信仰への反動であり、下位の公職の幹部を選択する上で、ヒンドゥー教徒の小ブルジョワ階級を既に差別していたイギリス政府に対抗して、北インドの低・中級クラスの職業人を再結成させようという試みになっていった。

実際のところ、父は1913-14年頃まではアーガー・ハーンのイスマール信仰との関係を完全に絶ったわけではなかった。しかしその間も実際には、社会的地位の高い専門職の人々やビジネスマンたちの社交クラブと化しつつあったアーリヤ・サマージの職務に携わっていた。

私は父が『ギータ』を読んでいたのは覚えているものの、その祈祷書に込められている理念を彼が実践していた様子を全く覚えていない。父は毎朝祈りを唱えることに執着してはいなかった。しかし例外として、入浴後にはタオルで体をこすりながら様々な神の名前を口にした！ 私には、父が生きるべき道を探求することの必要性に特に悩まされていたとは思われない。実際のところ、彼の時間の大半は、軍本部からの規定条項、副条項、文言などを読むことに費やされていた。軍規定は彼にとって聖書のようなものであったらうし、それを解釈することは、彼の生計手段でもあった。そして、その他の点に関しては、父は読書によって出会った観念と因習とを関連付ける試みもなしに、銅細工カーストの仲間の因習を受け入れていたのである。

幼少期に時折、私は父がインド軍生活の中の陰謀や収賄、残虐行為に関して不満を漏らすのを聞いたことがあった。そのような父は、退役し神聖な場所を巡り訪ねて余生を過ごすことを楽しみにしていた。しかし、職業的な習性と自身の金銭に対する愛着のためか、気分が

変われば、老いては神に身を捧げて過ごすことを奨励するヒンドゥーの名高い理念である脱俗性には反対していた。そして、聖なる神とマモン（蓄財の神）との折り合いを、父は忠実に追従していたイギリス人支配者たちの独特の方法でつけていた。様々な宗教祭事の折に母が用意する豪華な食事を楽しみ、婚約や結婚、誕生や葬儀の際には聖職者を呼び、ヒンドゥーの教義に対して口先だけの賛美を唱える傍らで、金貸しや家屋の売買、財産の抵当権や賄賂の受け取りといったような様々な副業と同様、有能な仕事ぶりによって蓄財に励んだという具合に。

私が通った英領インドの学校では、宗教的な教育は何もなかったが、インドの主な宗教祭日は祝日となったので、それは大いに歓迎されていた。それらの学校で施された教育というのは、模倣であり、インドの伝統はほとんど考慮されず、大部分がイギリスの教育課程の少し質を落としたものであった。学校の授業は英語で行われ、イギリスの歴史や思想、社会構造、制度の勉強にとりわけ重点が置かれ、インドの歴史や伝統に関連したものは全て劣っていると教えるように意図的に練り上げられたものであった。そのため、私はごく早い段階から土着の慣習に偏見を持ち、インドのものは全て嫌いという子供に育ってしまった。

確かに時々、私は鐘が鳴り憂鬱なホラガイの物悲しい音色が聞こえてくる夕方の祈りの時刻に寺院に走り込んだものだが、それはもっぱら、儀式の後に配られる聖水やお供えの果物を年老いた聖職者からもらうためであった。

たまに、軍服姿の従軍牧師たちを見かけることがあった。彼らは牧師特有の衿（クレリック・カラー）を付けるか、あるいは一風変わった紐や腰帯、インドの日よけ帽（トーピー）が付いた長い正餐服を着て、昼食を取るために真新しい自転車に乗って士官の食堂に向かっていた。私は単純にも宗教を、素朴で質素に、苦行的でさえある生活と連想していたので、これらの十分な食事を与えられ優遇される軍属の聖職者たちが、宗教人であるとは全く思えなかった。そして彼らが、イギリスの他の役人のようにインド人には滅多に話しかけず、イギリスのサーヒブ（Sahib、＜インド人が公職にあるヨーロッパ人男性に対して用いた「旦那」という意味の言葉＞）の贅沢な上流の生活をしていたので、キリスト教信仰というものを、宗教というよりは、むしろそのような司祭らが施す日曜日の礼拝に参列するサーヒブの謎めいた集まりだと見なしていた。

時々、私は純粋な好奇心から、内部で何が起きているのか見ようとして教会にこっそり忍び込んだ。しかし、サーヒブがたまたま居合わせたなら、インド人は一般的に教会に入ることを思い止まらせられた。私が知っていたキリスト教に改宗した少数のインド人たちというのは、軍隊の貧しい楽団員であったか、もしくは、キリストの教えに興味があるとか愛着を抱くというよりもむしろサーヒブの宗教から与えられる奨学金や衣服、より高い地位に魅力を感じていたように見えた、ミッションスクールに通う不可触民のどちらかであった。一回か二回、救世軍の指揮官の説教を聞いたことがあったが、当時の私にとって、それは十字架の上の、痛めつけられたひどい有様の像の特有の神格をひたすら主張する、退屈で意味のない講話に思われた。

過去に聞いたヒンドゥー教徒やマホメット追随者、シーク教神学者のどんな真剣な講義も

同じく退屈に感じられた。私は母が実践していた断食、熱のこもった長々しい祈り、アーガー・ハーンの家・ジャマート・ハーナ (Jamait Khana) 礼拝所への訪問、結婚、誕生、野辺送りの儀式も、母が家を留守にすることでいつもの日課の生活が送れなくなるために、ひどく嫌っていた。

私にとっては、両親とのヒンドゥーゆかりの聖地巡りだけが、懐かしく思い出される。聖地に決まって多くいる忌々しい苦行者、アグラのタージ・マハールのそばの池で初めて見た沢山の百合の花、父の後に続いて飛び込んだガンジス川で溺れかけたこと、マトウラ (Mathura) で手に菓子をもっているのを食欲旺盛なサルたちに見つけられた父が、聖地の中庭で腰布を奪われ裸で立ち尽くしていたことなどが鮮明に私の記憶に刻まれている。

そのようなわけで、私は若い頃はどんな信仰も宗教的理念も吸収しなかった。その理由はと言えば、今になって思えば、先に述べたように、ヨーロッパの影響によって作り上げられた混乱の中に潜在する何ものかだったと思う。異なる要素の統合というものに関して、イギリスはほとんど力を注がなかった。ただ帝国の管理政策を施行し、宗教信念、カースト、人々の信条や慣習に対する寛容性を公言した。勿論、寛容性は支配者にとって都合がよかった。古い迷信の傷口が化膿し、国を分裂させたままにしておけるからであった。いずれにせよインド文化の伝統的な様式が瓦解しつつあっても、哲学と宗教だけは、詩や芸術と同様、日常生活と深い繋がりのないまま、正統な信念となり、政府当局への恭順を示したり、絶望し希望のない人々を慰めたりという厄介な義務を逃れている。

そのため私は、同世代の大方の人々と同じく、非常に浅薄で、有害な教育を受けた方向感覚のない若者として育ってしまった。私の唯一の理想は、もしそれが理想と呼べるならば、父が親切な政府から贈り物として受け取ったもの——試験をパスし政府から給料をもらう良い従属的職務に就くことだった。

II

しかしながら、その数年の間に私は一つか二つ重い病気にかかったことで、思考がいくらか考え深いものとなった。そして学校の教育課程とは別に、ヒンドゥー語と英語の書物を貪欲に読むようになっていた。この読書は全て、もちろん、散漫で、主にお高くとまって賢く見せる手助けのようなものであり、それによって私は、厳格に学校の教科書だけを読んでいる同期の他の生徒より、もっと重要人物であるかのように振る舞うことができた。しかし、この余分な学外の作業は累積効果があり、私の持っていた純粋な知的好奇心は刺激され、思弁的な関心が芽生えた。その後、病気に悩まされたり、お粗末な数学教育のために算術が苦手になって、大学で科学を研究するという当初の目的をあきらめ、哲学を含む人文科学課程を専攻せざるを得なくなった。

大学へ入ったとはいえ、最初の2年間は何かだまされているような感じがした。なぜなら、私が尋ねたかった世の中に関する質問については、何も答が得られなかったからである。その代わり、私たちの課題は、シラバスに従って、論理学に関するシャルマ (Sharma) 教授

の2冊の初級教科書を注意深く調べ、最初の人文科学試験のためにJ・S・マッケンジー (J.S. Mackenzie) 教授の『倫理学概論』(Outline of Ethics) を頭に詰め込む勉強をすることであった。講師が採用した教え方というのは、章ごとに講師が本を朗読し、試験会場で学生が吐き出せるようにいくつかの部分に下線を引くように指示をする、というものであった。どんな理論が適切で、なぜ倫理学が必要なのかに関する説明はなく、ただ難しい英語の教科書の内容が、講師の易しい英語によって言い換えられるというだけであった！

試験をパスするために、ただ指定されたテキストだけではなく、そのテーマに関するものを夥しく読むというのが私の習慣であった。このいささか余分な読書によって私は、非常に漠然とではあるが、哲学的な追求における論理と科学的手法の必要性に気づき、哲学が関与する疑問に関しても理解し始めていった。

この頃というのは、抑圧的なローラット法をインドに課した帝国政府が、それまでは名前が知られていなかった一人の男性、ガンディー (M.K. Gandhi) の指揮下でインド国民会議によって組織された抗議運動を、流血行為によって鎮圧した1919年のアムリツァル事件をちょうど経験した時期であった。私は漠然とガンディーの思想に興味を持ち始め、特に質素な生活 (シンプルライフ) の倫理に関心を寄せるようになった。彼が雑誌の中で訴えていたのは、糸を紡ぎ、機を織り、手織物を着ること、3等車両での旅、不可触民制への反対運動、優れたアヒンサ (ahimsa <不殺生>) の教え、抗議運動の中で実践されていたような非暴力といったものであった、

ガンディーが1921年に政府への市民抗議運動から退いた後、私は同世代の非常に多くの人々と同様、国の独立を勝ち取る手段としてのテロ行為の可能性ということについて考え始めるようになった。その目論見は愚かしく失敗に終わった。

私は、マッツイーニとブルードンの作品の抜粋と、ゴーリキーの『母』を読んだ。しかしそれらは、特定の経験に対する見解を裏付けるといよりは、私の大陸とりわけロシア文学への嗜好を助長しただけであった。

誰かから『価値、価格と利益』と『資本論』の第1巻を、読むようにともらった。しかし、それらの本をこっそり読みながらも、マルクスの基本理論までたどり着くことはできず、学生たちの間で流行していたので、彼について語り合うのみになってしまった。でも確かに私はこの頃に幅広く書物を読み、ヴィクトル・ユーゴーのフランス革命についての小説を読んだりもした。アボットの『ナポレオンの生涯』(Life of Napoleon)、トーマス・ハーディ (Thomas Hardy) のウエセックス小説、バイロン、シェリー、キーツ、ゲーテやハイネといったロマン派詩人の作品を翻訳で読み漁った。

それは別に手当たり次第読み漁ったということではなく、1925年にアムリツァル (Amritsar) に教えるために来たL・R・プーリー (Puri) という私の新しい哲学講師との友情が、ある程度最初に読書をまとまりのあるものにしたということだと思う。プーリーの父親は、シーク教徒にとって聖書とも言える『グル・グランス』についての注釈書を既に執筆していた。そして思弁的な哲学における関心以外にも、彼は宗教的な神秘主義に熱中し、ピーアス川の土手に住んでいたシーク教徒のグル (guru <導師>) のチェラ (chela)、つまり弟

子として活動し始めていた。しかし私は、ビーアス川の彼のグルよりも、哲学の問題の解説の方により興味を持った。シーク主義というものが私にとって、背後に理路整然とした思想などが全くない、ヒンドゥー信仰とイスラム信仰の比較的関連性のないものの寄せ集めのよう思えたからである。それでも私は、L・R・プーリーを通じて人生を真剣に見つめることを学んだ。例えば、彼がバクティの原理を話した時、献身的に崇拝することや他人に仕えることを、どのように人生のあり方にするのかを説いたかを覚えている。母方の叔父が同じ事を私に語った時よりもずっと熱心に彼の話に聞き入っていた。

それ以降、私は誠実であろうとし、他人との関係において親切を示し、善良で、自己を完成させ、真理を探し、知ること、世界を理解し感じるべきことを全て感じる事が大切だと悟るように努めた。

利他主義と知識のこの試みには、私の子供の頃の顕著なエゴイズムに基づいて思春期に発達した、独りよがりの自己顕示癖の要素もあった。とりわけ、当時は我々すべてに開かれている機会の欠如を通してというよりは、同世代の人々の率先性の欠如ゆえとみなしていた大いなる平凡さを自らの内に見いだすにつれて、私は重要人物でありたい、ユニークでありたいと思った。この完全さを求める衝動は、幾分なりとも過度の動物精神から起こったかもしれないが、ほとんどは権力や影響力、名声といったものへの愛着から生じたものであった。役職や世俗的な成功、金銭に対する現在の野心より、真理への執心が少なかったというわけではなかった。実際、自分自身のエゴを読書や問題意識をもつこと、物理的な訓練によって拡大していこうと気にかける一方で、普通の野心を全く嫌っていたわけではなく、他の学生と同じく政府に仕える職業を確保することをとても気にかけていた。ただ、司法長官や他人より秀でた何かしらの者になりたかったし、確実に、補助裁判官の職 (sub-judgeship)、特別警視監の職 (Extra Assistant Commissionership) もしくは副税務官の職 (Naib-tehsildari) に就くといった、父の私に対する期待を超えたいとも思っていた。

しかし、こういった思い上がった野心にのめり込んでいる間も、私は家族がかつて属していた銅細工の職業については、他のカーストや階級に属する人々の俗物根性によって、夢から現実に引き戻されたような見解を抱いた。そして、銅細工の仲間たちの不正直さ、無知や迷信によって心がかき乱される中で、周囲の世界で全てがいかにか特権と地位によって支配されているかを知り愕然とした。

こういった矛盾の全てを理解できないまま、私はものを書き始めた。しかし、インド社会を改革する必要性から生じた衝動はすぐに、見せびらかすためのものになってしまった。私はヒンドゥー語で書かれた多くの詩を、特にイクバルの詩を読んでいた。私はすぐにお気に入りの中でも最も人気のある詩風を模倣し始め、他の多くのインド詩人のように、会話の中でスタンザを引用することに秀でようとした。詩のテーマに哲学的、宗教・社会的なものはどんどん薄れ、逆に恋愛の要素がより多くなってきた。今日のインドの中産階級社会における男女間の社会的接触に関する一般的タブーによって、我々のほとんどは、自らの欲望を、近くにいる顎鬚の無い少年に向けた長く虚しい、情熱的に切望する嘆願に昇華した。私が以前に抱いていた誠実さは、当時私が求めた上流階級のうぬぼれた若い流行詩人たちとの交流

によって蒸発してしまったように思われた。

最終試験に向けての準備の必要が迫ってくると、再び深刻な問題に引き戻された。たとえ優等学位を取りたいという欲望のために、文学、哲学、当時の経済学といった分野の素晴らしい書物を十分に気ままに楽しむことが妨げられるとしても、私は既に大学で哲学を専攻することを決心していた。ヒュームが『人間本性論』の中で詳述した懐疑主義の精巧な理論に特に感銘を受けた。ロックやバークレーという彼の先人のどちらの著作も、そして後継者のカントの作品も原文で読んでいなかったのが当然のことながら、ヒュームが唱える精神と肉体双方の否定、全知識を観念と印象の単なる関連付けへ降格することの意義を完全には理解できなかった。しかしL・R・プーリーのヒュームに対する理想主義批判への反動として、私は自分のことをヒューム派(Humian)と見なしていた。

この頃、私は数々の精神的に困難な闘いをしており、それは哲学を勉強することだけではなく、自己嫌悪と家族への嫌悪感に由来するものでもあった。家族は私が副税務官か何かになるというつまらない理想を固めており、私はといえば、繰り返しになるが幾分なりとも過度のうぬぼれから、またある程度は純粋な好奇心と知識への愛着から、より高い学問を追求すると心に決めていた。

卒業後、私は自分が培われてきた教育システムというのが、まやかしく、愚かしく、従属的職業のために設定された基準にさえ辛うじて何とか足りているもので、その職業のための一種の募集要項のようなものであったというだけではなく、偶然にL・R・プーリーや歴史家C・W・S・ハーベイ(Harvey)、ララ・マン・モハン(Lalla Man Mohan)といった人物に私が出会わなかったら、全く得られるものがないものであったということを理解した。私は、自分がインドで高い学位のために勉学を続けるとしたら、いつの日か私が法律を学び司法職に就くという父の願いに妥協しなければならなくなり、世界で知識階級の就職率の最低さを誇るこの国での地位を確立するために、真理を探究する私の研究が全て失われることを理解していた。学問の原産地で勉強をするというこの上ない機会を与えてくれる可能性を別にしても、依然として海外の単位に希少価値があると思えたり、また利権あさりという観点からさえ、イギリスで哲学を研究する方がインドに留まるよりよっぽどましだと思った。その上、ヨーロッパ界限というのは多少なりとも自慢できる価値もあった。

私は、父がかつて受け入れなければならなかった全ての妥協、また俗世で成功し、政府の言うことに従い、父親が選んだ女性と結婚し、尊敬されるべき人物として落ち着くというような考え全てを憎むようになり、父と何時間も口論するようになった。そして、あらゆる側面から束縛され締め付けられ、成長や自己認識はそもそも最初から阻止され、膨大な数の人々が無知と人間以下の生活を強いられ、強い鳥が弱い鳥の群れの中に立つように、少数の特権階級が他人を餌食にするような中で、空虚で平凡な毎日の退屈さに苦しめられた夏を過ごした後、真理への興味を満足させることができないのなら死ぬか崩壊するだろうと悟り、ついに私はインドを去ることにした。それは1925年の秋であった。

III

ロンドンに到着し、私はカント派の哲学者であり『ヒバート誌』(Hibbert Journal)の共編者でもある著名なG・ドーズ・ヒックス(G. Dawes Hicks)教授のもとで、哲学博士号を取得する研究を行なうべく、ロンドン大学のユニバーシティー・カレッジに入学した。

ヒックス教授からは、ヒュームやその先人たちによる知識についての理論、特に因果関係、アイデンティティーといった命題の扱い方について研究するように指導された。

ギリシア哲学から近代哲学全般の歴史にわたる、週に15にも及ぶ彼の講義に出席したし、カントやヘーゲル、ブラッドリー、またバートランド・ラッセルについてのセミナーも受講した。そしてその最初の数日間で、私が以前から切実に感じていた事柄、つまりインドの大学における哲学教育がいかに粗末なものであるか、そして私自身が、「現実」、「知識」、「神」、「不滅性」、「生存」、「悪と苦しみ」といった根本的問題について、答を見つけることはできないにしても、これらをインドで独自に探究する試みをしていなかったら、今ここで行なっている研究に立ち向かうことはほぼ絶望的だったであろう、ということを理解したのである。

1925年から26年にかけて、私は近代哲学の古典といわれる著書を読んだ。しばらくの間、私はインドの宗教と哲学の体系を渴望していて、サンスクリット語を学んで、人生における疑問に対して、よりバランスの取れた回答を与えてくれる古代インド思想の一派でも学んでおけばよかったと思ったりもした。ところがその時、恐らくヒックス教授の科学的手法による哲学研究を好むやり方に影響を受けていたせい、あるいは以前に行ったヒューム研究に染められていたのか、私はデカルトから始まる近代のヨーロッパ哲学者が、認識論に対して「現実とは何か」を問うための準備として我々がどのように知るのか、という命題に対して置いた重点の意義について認識するようになってきた。

しかしヨーロッパの伝統には、どちらかというところと困惑してもいた。バークレーやマールブランシュのような偉大な西洋哲学者の著作のある部分では、神の本質と特質、存在の意義などを説明しようと試みているが、その論理がかなり不安定な仮説の上に成り立っているように見え、いわゆるキリスト教の罨を、整然とした小振りな哲学的パターンにはめ込もうとする試みが絶望的に矛盾していて、私には殆ど何の価値も感じる事ができなかった。

私の哲学に対する興味というのは、基本的には全くの好奇心から起こったものであり、部分的には自分自身と、自分がその一部である世界について知りたいという欲求、自然に沸いてくる欲求に起因している。私はかなり漠然とはあるが、「神」、「不滅性」、「苦痛」などの普遍的に受け入れられている宗教的概念を、ある程度の自信をもって相互に関連付けようとしていた経緯がある。私はインドの伝統からは疎遠になっていた。そして近代ヨーロッパの伝統的信仰には、その狭量さや派閥主義のために、惹かれることはなかった。さらに、近代思想の多くに見られる学問的形式主義にも、感銘を受けることはなかった。私は、哲学が人間の要求と興味から生まれる問題について、理性を通して答を出すべきであると感じてい

た。実際、私は合理主義哲学と経験に対する人道主義的見解に傾倒していた。

しかしヒックス教授の影響を受けた私は、しばらくの間、哲学は人間の要求と興味から生まれる問題を扱うものの、その哲学は、有用性や主観的満足といった要素からは一切の影響も受けずにこうした疑問の解決を目指すものであり、人間の必要と興味にかかわる本質とは何の関連も持たないのだという理論的観点を受け入れている自分に気がついた。

それでイギリス到着直後、私は一世代のあいだイギリス思想界に引き起っていた歴史的論争の混沌とした騒動に、つまり理想主義と現実主義の一般学派間におけるシーソー論争に巻き込まれてしまった。

そのような最中にも私は、人類の持つより偉大な信仰という観点から哲学を探求し、かつこうした信仰の妥当性について、自分自身の経験に基づいて確証を求めようとする何人かの思想家に出会った。現代科学の精神に感化されて、事後的側面から科学的問題に取り組む学者もいた。勿論それぞれの観点の支持者の中にも、さらに異なる見解もあった。例えば、経験するプロセス自体が啓示であることを含むような経験を与える世界を起点として学問を進める理想主義者がいた。あるいは、人間の精神における思考、意志、感情といった一時的なプロセスの中に、「真理」、「現実」、「美」、「善」への手がかりを見い出そうとする哲学者もいた。前者は、世界の永続的要素、非一時性における一致を強調する考えに基づき、後者は本質的に変化してゆく世界の多様性に重点を置いていた。

ヒックス教授の場合は、一般的には現代イギリス哲学における現実主義的潮流として知られる学派に属する哲学者で、空想的かつ超自然的な19世紀文学（特に、コールリッジ、シェリー、ワーズワースといった作家に代表されるプラトニズム）、さらにドイツ哲学、なかでもカントやヘーゲルらの影響に対抗する反応として興隆したと思われる科学的な分析への志向があった。

しかし当然ながら、ヒックス教授の現実主義は、独特の鋭さと知識の事実性に関する独自の解釈を特徴としており、他のイギリス人哲学者の現実主義とはその形態も内容も異なるものだった。彼の場合、知識の理論をその起点としていて、知覚的、概念的を問わずに知識からは独立した、いかなる種類の主観論にも対抗するものとして、物事の実在を主張することに重点を置いていた。一方、他の現実主義者は、科学の分野に見られる世界をその起点とし、それを分析し描写することを強調した。しかしながら教授は、単に知識の理論だけではなく、他にも異なる哲学の研究分野があることを否定したりはしなかった。例えば、我々が「現実」として知るものと互換性があると思われる体系について詳細に考察する形而上学、人間の評価的経験を分析する「倫理」および「美学」といった学問、あるいは「現実」に対するヒトの人間性の全体的反応を総括する「宗教」といったものが挙げられるが、教授は、大雑把にまとめ上げるような陳述や体系構築を意図した予示的試行に重点を置くような推測的手法には反感を持っていた。

教授のそして他の現実主義に対する私の一時的な偏重によって、私は科学について四六時中考えを巡らす結果となり、実際哲学は私にとって、科学の基礎的仮定を批評する手段となった。このことについて、私は当時の潮流に身を任せていただけなのだが、この科学に対

する執念は、素人的とはいえ私に科学を研究する機会を与えてくれたということにおいては有用であったと思われる。しかし私は、知識と信条の正当化という命題に自分の注意を集中させ始め、「神」、「現実」、「不滅性」といった大衆性のある概念を、最新の科学の研究結果に照らし合わせて理解しようと試みていたのである。

「照らし合わせて理解しようと試みていた」と述べたが、実際には以前から私にとっては十分明らかであった事実に自分が「気がつき」始めたという意味で「私は理解した」と言ったほうがより真実に近いだろう。例えば私は、宗教上の前提と科学上の発見の間にはほとんど共通点がないということに漠然と気がついてはいたが、ここに至って双方の主張は、これら二つを何とか和解させようとする勇敢な弁証者はいるものの、根本的には両者は対立しているということが証明された。

私は、キリスト教の教義を全て知っているわけではなかったが、一般的にこの宗教は他のどの宗教よりも科学によって衝撃を被ったように思える。例えば創世記の第一章の記述を文字通り受け入れるならば、当然のこととして、より脆弱な宗教となる。キリスト教徒として生まれ育ったわけではなく、かつキリスト教を理性的な教義とすべく人々が解釈を試みてきたこうした隠喩的表現に慣れ親しんではない人にとって、種の突然変異や自然選択といった学説の前に、聖書の生命の理論というのはさぞ滑稽に思えたことであろう。それだけではなく、上方に広がる天、水平に広がる地、そしてその下の地獄という、これまで一般に受け入れられてきた「三階層」の地理的配置の記述以外にも、科学と拮抗するキリスト教の根本的仮説はまだまだある。例えば、自然には創造者あるいは神なしでは存在しえない設計が見られるという論議に対しては、宇宙には設計や秩序を示唆する証拠はほとんどない、あるいは、実のところ生命は我々が知る物質世界の中からまさに予見不能かつ突発的な仕方でも生まれ続けている、さらに、こうして宇宙を創造した神が悪と苦しみを増大させてきたなかで、科学と人類の知識がそれらを制御すべく尽力している、といった逆の主張によっていかにも容易に答が出せるだろう。私の中の知性の原子は、人類が抱える説明しがたい多くの問題に対して、科学的理論という新たな光が投げかける証拠を受け入れるよう私に強いていた。

例えば、『種の起源』の出版が思想の歴史における最も画期的な出来事の一つであったとするならば、人類の思索および行動の歴史において、このような画期的な出来事というのはもっと頻繁に起きていてもよいのではないかと思われる。T・H・ハックスリーのように、ダーウィンによってもたらされた衝撃を受け止める度量を持ち合わせながら、科学が伝統的宗教と哲学を何らかの仕方でも再設定するであろうと信じ続けた人々というのは、少なくとも私の考えでは、人類がそこから進化してきたオランウータンと同じほど昔からいてもよかったのではないだろうか。確かに、アーサー・エディントン卿のように物質世界の本質を理想主義的に解釈しようとする試みはあった。エディントンは、我々は物質の真の本質についてはそれほど多くを知ることにはできず、我々が知っていると思っていることの多くは、実は自分自身の思考の産物であると信じていた。しかしヒックス教授が常に指摘していた様に、常識的現実主義の観点から見た場合、現実の幾つかの要素は合理的ではあっても、そこには別

の実質的特性があつて、しかも我々の理解を超えた範囲で存在しているのだ。我々がそれについて多くを知らないということは、現実には客観的ではないということではなく、またその挙動が不確実でかつ予測不能であるということは、それが現実ではなく自由意志を持ち合わせていないということを示唆するものではない。ここに述べた観点から、またアインシュタインの相対性理論そして最近の生物学の研究結果を考慮すると、私にとって、宗教と科学には深い友情関係は成立し得ないもののように思える。

キリスト教について多少荒削りの批評を述べたが、それはこの宗教が我々の時代においていわば共通通貨のようなものとなっているからで、この点については後ほどさらに詳しく考察したいと思う。しかしながら、過去半世紀の間に、一般に受け入れられてきた宗教あるいは道徳の基盤を蝕まなかった発明というのは、大なり小なり、ほとんどなかった。例えば、ヒープが胎芽期のウサギを一匹のメスの胎から別のメスへ移すことに成功したことや、ホルデンが胎芽期のネズミを漿液内で発育させようと試みた事実は、生物学の研究分野である、ヒトと他の動物および植物の関係性全般において、社会の様相、方法そして形態に対する革命がこれから起きるのだということを約束する出来事だった。メンデルとヴァイスマンによって発見された個々の生命体と、その構成部分についての既知の事実に基づいた一般論は、既に時間が経過したもので、発表された当時は、哲学的また社会的理論に深遠な影響を与えるであろうと思われた。それはさておき、生物学の実用的応用はすでに人間の行動に奇跡的ともいえる変化をもたらしていた。今日、工業地帯では未だ劣悪な住環境が存在しているにも関わらず、100年前の乳児死亡率は今日より高かったという事実は、様々な宗教が静的であると見なしかつ自分たちが扱う範疇外であるとしてきた社会秩序が、今や考慮に入れるべき対象であることを示唆している。

外部遺伝の研究の進歩により可能となるかもしれない、性愛と生殖の分離が人間心理学と社会生活に対して及ぼす影響については、現時点ではただ推測できるのみである。しかしこうした可能性が、優生学の一般的概念の多くを既に隅へ追いやっている。また生物学的原理の実用的応用によって、多くの美德そして悪徳が新たに生まれてくることは極めて明白だ。例えば、我々の知的な能力が正常に機能するか否かは、おもに甲状腺と生殖腺に代表される特定の体腺がいかに正常に機能しているか、そしてそうした腺機能の変化が個人の人格にどのように影響を及ぼしているか、といった要素に関連していることは既に知られている。こうした分野について更なる知見が得られることにより、例えば、これまでの社会で行なわれてきた愚かともいえる処罰の方法が、身体学や心理学的な手法を適用したものへと変化していくだろう。パストールの感染に関わる発見を機に特定の病気が根絶された現時点で、身体的疾患との取り組みにおいて不可能なことはないように思える。同様に、フロイトの大胆な仮定は、精神の病について我々の知識を発展させ、我々に精神の起源を原始の集団的無意識に遡らせるユング博士の解釈を展開させた。

科学に対する私の同情心というのは、おそらく青春時代に抱いた情熱のせいかもしれない。科学と歴史の分野で起きている進歩は、私にとって魅力的でさえある。恐らくそれは、応用科学の発展が、インドではまだまだ不足している公衆衛生、電気、航空機、そして様々

な道具や機器の生産や実現を可能にしてきたからだと思う。そして科学により、文明はより高度化かつ多様化し、そしておそらくこれまでのどの時代よりも豊かになる可能性がある…だが、もちろん私は科学の悪用により確実にもたらされるであろう悪について全く無知なわけではない。しかし、私をヒンドゥー文化が陥った迷信の泥沼から引き上げ、「理性」を究極の神とした科学のもつ説得力と道理には大きな魅力があった。加えて、科学には想像力を掻き立てるものがある。宇宙のすべての要素は継続的に発展し続けてきており、この世界の一部をなす人類は、古代からの先入観によりその知性に対する抑制と不利益を経験してきたにも関わらず、これまで変化を遂げてきて、常に前進してきたわけではないにしても、少なくとも深みと強さを増し加えかつその展望を広げてきた、といったことを科学は想起させる。

しかし私は、科学の根本的仮説についてはそれほど楽観的で高揚していたわけでもない。「現実とは何か?」「自分は何者か?」「我々はどのように知るのか?」「宇宙とは何か?」「空間、時間、物質、運動はどのように説明できるのか?」といった哲学的命題は、まだ解決されていなかった。近代科学の最大の発見といわれるアインシュタインの「相対性理論」も、昔から哲学者たちが仮定してきた時間と空間の観念的結果を推論したに過ぎない。その理論は、カントの称える4次元の「物自体」の性質を変えた訳ではなく、ただ時間、空間そして物質が、知りえない現実の反映である5次元の影であることを提示したに過ぎない。そして、現代のイギリスおよびアメリカ合衆国の現実主義者が、その経験の分析においてカントとヘーゲルをすでに超越したとはいえ、科学者が当たり前のものと受け入れていた根本的仮説は、引き続きカントの理想主義であり続けたのである。

IV

私の人生に深い影響を及ぼした出来事が起きた時、私はまだこれらの学問的な問題に取り組んでいた。この出来事とは、1926年のイギリスのゼネストであった。

突然、青天の霹靂のごとく、外の世界全体が私の認識を高めたと思われた。私は、炭鉱夫と国民の中に存在する彼らのシンパが公然と政府に挑戦する一つの国、ここイギリスにいた。その政府の手によって、私自身の祖国インドも何世代にもわたり苦しめられてきた。「何かが間違っている」のだった。もし科学上の発見が、主要産業を統制し、国内外の問題に関して絶対的な発言権をもつ少数の個人の利益にかなうように操作されるとしたなら、科学の恩恵に思いを馳せるのも無益であった。私には、イギリス国家が、望むなら人間の進歩を何千年も逆行させることができるほど反動的な保守主義によって掌握されているように思われた。

さらに奇妙なことに私は、ロンドン大学の学生のほとんどが、数人を除いてスト破りとして活動し、路面電車、バス、地下鉄の運行を助け、ゼネストを妨害していることを発見した。

私は、ずっと後になるまで、そのストライキを推進した大義名分をよく理解していなかった。しかし私は、他人から生活に必要な仕事を運営する手伝いをするように威嚇されることを拒否した学生のグループと交際があったので、ガワー通りで (Gower Street) 起きた騒乱

中に暴徒に襲われ、軽傷を負うことになった。

この体験によって私は悲嘆にくれた。しばらくの間、私は知識と信念を正当化するための高尚な探求から退き、哲学研究がイギリスに到着以来、自分を祖国インドの道徳や政治に関する当面の問題から完全に引き離して、自分がインド人であることを忘れさせたという事実を認識したのである。

この啓示は、何かしら私には衝撃的であった。なぜなら、イギリスに到着するや否や、私はここで働く荷物運びや清掃人、その他の労働者がもつ奇妙な自尊心と威厳に驚かされたからである。彼らは、高カーストあるいは上流クラスの人々から常に蹴飛ばされたり脅し上げられ、時には惨めな屈辱を忍ぶインドの苦役とは対照的であった。私は、不愉快な仕事をする人々が労働の尊さを認識している様子を賛美した。そして、労働者たちが何時間もの下働きの仕事の後に、汚れを洗い流してそれぞれの娯楽を求めて歩き去る有り様を見て、私は彼らが民主主義社会の自由市民であるという幻想を抱いた。

しかし、この幻想はいきなり打ち砕かれた。今や私は、西ヨーロッパに存在する民主主義は、何世代にもわたる継続的な人間の犠牲によって達成されたものであることを理解した。確かに、イギリスには、古きインドにはほとんど無かったような、個人の自由という定着した感覚があったし、好きなようにものを言ったり考えたりできた。しかし、危機に面しては、これらの自由はすべて無くなってしまふように思われた。そして「人民のための、人民による、人民の政府」という言葉は、ほとんど実現できそうもない一つの大望になってしまうようであった。イギリス人が民主主義体制下の政府の恩恵、投票箱や放映権、精巧な憲法の制度の恩恵を受けているのは真実である。イギリス議会は、第三者には、ここイギリスでは不満は表明され解消され得るという信念を促しているように思われた。しかし「怒れる夏」の間、民主主義の精神はどうなったのか。民主主義への信頼、あの政府の人民に対する信頼、あの人民の政府に対する信頼はどこへ行ってしまったのか。それらがなくては民主主義は虚偽、宣伝文句、単なる用語になってしまうのに。第一次世界大戦と同様、小規模ながらも、このゼネストの利権をめぐる対立は、19世紀のイギリスの産業と自由主義の運動と共に発達し、人々に希望を与えたかのように思えた偉大な民主主義の観念を崩壊させた。さらにそれは、富を求める貪欲さ、自分や自分の利益を愛する気持ち、それぞれが自分自身のために、最後になった者は放置しろ（早い者勝ち）という主義を伴う、利潤を競って貪る商業文明につきものの利己主義の哲学を露呈した。

恐らく民主主義の主な失敗は、選挙民が自らが選んだ一旦権力を握った代表の行為を統制できないことにあるように思われた。「人民による人民の政府」は美しい詩的な観念ではあるが、実際に機能している民主主義の技法には、人民が権限をもたせた人物たちが一般大衆に対する責任を放棄して、権力を愛すること自体を目的とするようになっていたことを精査する方法が欠落している。少数の内閣の大臣たちが、既得の権益と結びついて、いとも容易かつ確実に、民衆の意志を拒むことができたし、しばしば実際に拒絶した。彼らは、軍隊や言いなりになるプロパガンダ機関を所有していたし、民衆の目には権力と映るような威信もあった。そして彼らは、「法と秩序」を説き、人民を単なるはったりの言葉で威嚇する間は、

常に剣を鞘に収め、あまり権力をひけらかさず、利口に振る舞った。故に統治するように訓練された最善の人物は信頼できるというイギリスの民主主義の基本的な前提は大そう疑わしく、「半分目覚めた」人々にその民主主義を進歩の極みとして差し出すような人物の自己正当化は、偽善に満ちていた。ゼネストは、イギリス国民もインド国民と同様、まだこれから自由を獲得していかななくてはならないことを、私に教えてくれた。

かの緊張を強いられた一週間にわたるゼネストが失敗して、私は幻滅を加速化され、自分の立場を再検討し始めた。私はインドの隷属状態を記憶していた。私はその中で生まれ育ち大人になった。アムリツアル事件以来、私の同世代が味わったすべての屈辱も覚えていた。どういうわけか、インドの問題は、私がイギリスで目の当たりにした、敵意に満ちた戦いが繰り広げられることになった問題と関連しているように思われた。これらのことを考慮すると、私自身の立場もイギリスに滞在する他のインド人学生の立場も突然、偽りで馬鹿げているように思われた。

我々のほとんどは、帰国後により良い仕事を手に入れ、個人的に昇進するためだけに利用したいある一つの外国文化をいく分か吸収しつつあった。私は、何人かのイギリス人学生と同様、純粋に学問を愛する気持ちから、哲学を追求してきたと考えて自らを欺いてきた。しかし、自分が利権あさり以上の者でないと心の奥底で悟った時、私の虚勢は総崩れになった。そしてインドでは、イギリス当局が一つのコミュニティーを別のコミュニティーより好むという原則に関わりと影響力をもって、恣意的に個人を選択する政策をとるために、仕事がますます少なくなったので、私は間もなく、自分が祖国の同胞やゼネストで炭鉱夫の味方になった数少ないイギリス人学生と深い縁をもっていることを悟った。

この後、二つの影響力によって国内に対立が生じたために、私はイギリスでの生活の中でその緊張を意識し始めた。一方には支配階級の愛国主義的で、詐欺的な偽りのプロパガンダがあった。他方では、礼拝所に通って聖書を読む先祖の因習や、支配者のためなら他国を抑圧に行ったりあるいは死んでもよいと言うほど、上流階級の虚勢を天真爛漫に信じ込んで抑圧されてしまう、「平凡な人々」の社会保障を求める大望があった。

後に、私はイギリスという国家が、国としての統一性を顕示するものの、ディズレーリの言葉通り、「二つの国民」の偉大な闘争を浮き彫りにしていることをより明確に理解し始めた。その闘いは産業革命以前からずっと続いていたのである。1926年のストライキは、イギリス本国が大英帝国の領土と同様、暴力的に大衆を抑圧できる少数の利益のために組織化され、運営されていることを私に教えてくれた。

私はまた、現代の国家は、近代科学が包含する国際主義に遅れをとっていることが理解できた。ラウンツリー (Rowntree) によれば、住宅事情は百年の間に飛躍的に向上し、小間使いの娘がウールワースで絹のストッキングを購入して大邸宅の貴婦人として通ることもあり得るという。そのような事情にもかかわらず、西ヨーロッパの人々は、近代化に必要な順応をしてはいなかった。私にはこのような状況や、一つの文明国民にその文明の名にふさわしい教養文化的な覚醒をさせることは、物質的、社会的に遅まきながらの進歩をもたらすことよりも、さらにずっと時間がかかることを認識することができた。ある程度まで、これらの

考えは、ある若い共産主義の女性、エルティー・ヘルマン（Eltie Helman）との共感や交際によって生じたかもしれない。ある日、ガワー通りで私は、彼女から二つ三つのパンフレットを買った。彼女との交際によって、私は自分がインドの緊密な家族生活から抜け出して、友情が得難く排他的で、高度に個人主義で利己的なイギリス社会へ飛び込んだことに気づき、孤独なインド人学生の境遇を慰める友情の一つを育んだ。しかし、エルティー・ヘルマン以上に、私にイギリス社会の階級主義的な性質を教えてくれたのは、ゼネストを阻止したイギリス政府であった。

V

私はこの時期までに概して、学問的な哲学を、目的のために特別に考案されたつまらない専門用語の放出と考えるようになった。そして人々が精神的、倫理的に混乱しストレスを感じている時にするようにあらゆる方面の活動に手を伸ばした。研究期間の後には、インドに夢中になってインドの理念を再発見するようになった。

自分が試みたヒンドゥーの芸術観についての評論を通して、私は幾分なりともインド思想の発達を正しく理解した。そして、仏陀の人道主義的抵抗と、叙事詩の時代と古典時代を通してヴェーダやウパニシャッドから発達し断片化したすべての複雑で難解な学派の思想と、後にバラモン神学派、ヴィシュヌ派、シヴァ派、シャクティ派に分かれたが、それらの宗派が依拠した中世期の聖典の基層をなす宗教・哲学の観念を把握するようになった。

今日のインドの宗教・哲学的な信仰や実践について一般化するのには誤っているだろう。恵みの神ヴィシュヌ、破壊と創造の神シヴァ、母なるシャクティをそれぞれ賛美することは、ヒンドゥー主義の主な三つの信仰形態であり、あらゆる種類の信仰の拡大をもたらした。純粋な教義を見出すためにこれらを類別することは容易にはできない。さらに、歴史のある文化的遺産に必然的ではあるが、すべての宗教的伝統は、全く関係のない様々な観念や影響、遺物の重なりによる装飾を施されている。私は既に、子供の頃に奇妙な祈祷や母の聖典の朗誦に対していかに反応したかを語った。そのため、ヒンドゥーの信仰やその背後にある伝統的な観念を再発見し始めても、自らの魂の慰めをあまり探し求めなかった。むしろ、私は宗教的感情や哲学的な信念の主流を理解しようと努力した。

私は『ラーマヤナ』や『マハーラーバタ』、『バガバッド・ギータ』、プラーナ聖典の寓話や物語を読んだ。私は何を発見したのだろうか。

これらの古代の書物は、半歴史的で半神話的な記録の物語を通して、太古の時代について語っているが、その広大な文化の貯蔵庫からは何の教義も現れてこない。また、今日の宗教的儀式やグロテスクな幻想や迷信の中に多くの意味を見出すことも困難なので、私は現代的な解説書を抛りどころにせざるを得なかった。

私は、ラーダークリシュナンのような新ヒンドゥー主義の立役者から解釈される限りではあるが、伝統的なヴェーダの理念が「実在」は「絶対者ブラフマン」（梵）であり、存在の無限で無条件な状態であり、五感よりもむしろ神秘的な直感による叡智であることを認識し

ている。しかし、「絶対者ブラフマン」が超越的な「実在」であるのに、宇宙の意志は、芸術家が芸術作品の中に自己を表現するかのように、戯れによって世界過程の中に顕現する神を通して現れる。なぜ「絶対者ブラフマン」がこのように自己を現すかについては、それが「絶対者ブラフマン」の自由の表現だという以外には、何の解答もない。神の霊は、人間の息のように、姿をはっきり現すまで大海の上を動く。そして世界は「時間」中ではなく、「時間」と共に創始されたという。それでは、神は量的ではなく、質的に人間や自然の中に存在することになる。例えば、数的な単位の1は他のすべての単位では2, 3, 4等になるといった具合に、神は複数となって自己表現する一つの単位である。そして「絶対者ブラフマン」すなわち神は、二元的に姿を現す。故に人間は神の精神を分かたず、創造の過程から生じた混乱や錯綜の中で高尚な自我を失い、創造者の方へ移動し吸収されたいと願うようになった。

この絶対論に照らせば、宇宙はすべての物が神に向かいつつある歴史的過程の中の霊的存在の最も小さい塵になったように思われる。そして、人間のすべての活動は、その必要や興味によって生じる感情、行動、思考の習性に結びついているが、神と合一するために自らを完全な者にする過程で、出生、再生の永遠の輪廻に巻き込まれているようである。

これが人間というものなのか！ 人は望めば神を実感できるものの、恋する者が恋人から引き離されるように神から隔てられながら、神の霊からインスピレーションを受けた取るに足りない存在なのである。

この否定的な伝統的思考は、私が新たに得た観念を歪めてしまいがちになった。なぜなら、この考えによれば、少なくとも欲望には2種類、高尚なものと低俗なもの、即ち心の葛藤あるいは聖職者のご機嫌取りによって神との合一を目指す人々の自意識を反映する欲望と、貧困、病、欲求不満などのような俗世の悲惨さから逃れたい人々の小さな欲望があるように思われる。そして、明らかに、いかにその地位が屈辱的な低いものであっても伝統的なヒンドゥーのカースト社会の枠組内の自分の地位を素直に受け入れる者は良き市民である。一方、その伝統にあえて疑問を投げかけ、不本意ながらも苦しむ者は社会から嫌われる精神病患者である。すべての者は、誕生、再生の輪廻の中での生まれつきの地位があり、運命を受け入れなくてはならなかった。無論、日常の目に見える世界の中では自らの地位を変えることができなくても、人間には永遠に問答をしたり、自分自身を「実在」の一部と見なす権利があるというのは、別の話である。それ故、人は神に満たされることが可能であり、必死になって全知全能の霊、天上の「絶対者ブラフマン」と合一できると悟ろうと、ひどく心を乱した衝動的な虚構的存在であり続けながらも、現実には自らを向上させる望みもなく、地上の地獄のような非道な状態に身を委ねているのである。

これが人間というものなのか！ 神が自分を分裂させて宇宙を創造し、あらゆる方法で屈辱的な限界を敷いて束縛した自分の創造物に欲望の要素を注入した時に、人は失ってしまった誇るべき特権を永遠に恐れる弱々しく貧しい、ちっぽけな存在に縮められた人生に縛りつけられた。

しばらくの間、自分自身の中で半ば中断された対話がまだ続いているのを発見するまで、この新ヒンドゥー作家たちの作品からにじみ出た曖昧模糊とした「良心」が、私と私がヨー

ロッパから得た新しい価値観、時間の観念、アルコールとタバコ、生への渴望を非難し続けた。

「良心」： あなたの真実の探求、美への欲望、あなたの奉仕や社会正義への理念は、あなた自身の自我に仕え、それを拡大する試みである。あなたが重要人物に見え、繁栄するためのものである。あなたが大そう誇りにする目的は、実際は自我からの解放ではなく、自分の人格により高い価値を与えるために、あなたの利己心を合理化することである。人間の世界において人間性から逃れることはできない。あなたは欲望を断ち切らない限り、自我の束縛から自由にはなれない…

「私、私自身と私に」： だが、私は決して私欲のない真実の探求者ではなく、他の人々と同様に、欲望に満ちている。

「良心」： それでは、あなたはこの仮の宇宙の中で囚われの身であることを運命づけられている。一連の欲望が別の欲望に繋がるなら、あなたは常に因果応報の鎖に縛りつけられたままであろう。

「私、私自身と私に」： あなたに欲望は悪と同様、善も生み出すことを告げさせて下さい。

「良心」： それはあり得ない。真の善は「絶対者ブラフマン」だ。それは最も高尚な理念でもあるが、「時間」の外にある。

「私、私自身と私に」： しかし、もしあなたの神が宇宙を創造し、この世に顕現されたなら、悪と同様に潜在的な善も世界に導かれたはずである。確かに、もし神が創造において全く気ままに楽しく自己を分裂させ、創造物が神に至るものなら、神の性格は創造物に左右されるものであり、進化の可能な不完全な世界に言及する場合のみ、実存するものである。

「良心」： 「絶対者ブラフマン」は創造という局面において神の上であり、「時間」を超越している。「時間」の外を除いて、ヨガの実践なしに、あらゆる潜在的な価値、「善」、「真実」、「美」は実現されない。「時間」、欲望、人間性からの解放のみでは、永遠の真理は実現されない。

「私、私自身と私に」： まず第一に、あなたは「絶対者ブラフマン」なるものを前提にしている。そして呼吸の制御や、曲芸師が逆立ちをしてバランスをとったり、ヘソを見るような滑稽な姿勢を通してのみ「絶対者ブラフマン」との合一が可能であると言う。これは明らかに愚かで矛盾している。また、もし人間に価値あるものを達成しようとする良心があり、人々がすべての物を神に返すことにおいて、受動的な参加者ではなく善を達成する積極的な主体であるなら、なぜあなたの神は、世界にあらゆる潜在的な悪を背負わせるかわりに、潜在的な善を好んで、天秤をほんの少し傾けて人間が「善」や「悟り」を達成する手助けをしないのか。なぜ神は「時間」の外で血を流すことなく、純粋で私欲のない「意識」のままではないのか。さらに、生きるために、この世の実りを楽しむために苦闘する人々についてはどうなのか。

「良心」： 「絶対者ブラフマン」は「時」、「善」、「美」、「真実」、「欲望」を超越した存在である。万物、人間や動物の類の上であり、人間性とは無縁の超越的な至上の存在である。一方、人の上昇したい、人間性を超越したい、霊的で永遠の善を実現したいという欲望は、

正に永久に人間性に束縛される運命を人に背負わせている。そして他にも様々なものを。

高尚だが何かしら術学的なヴェーダーンタ学派の理念によれば、人間には逃げ道がないように思われた。その理念に基づいた信仰といえば、理性を究極的には非道なカースト制度に対してと同様に、信仰や神秘的な直感に対しても屈服させている。

キリスト教は多少なりとも好ましかっただろうか。

確かに、新約聖書の中のキリスト教の基本的な福音書の100頁余りには、人生について多少なりとも素朴で最も美しい真実が含まれている。そしてその真実は、時に矛盾を孕み、不公平でもある。そのため、ガリレアの大工の息子（イエス）は、上品で優しく、聡明で人情味のある性格をもち、殉教に至るまで献身的で世界が知る最も善良な一人であったので、真実以上のものを説くことになった。

しかし、キリスト教の理論家は、イエスの善良さのみに基いて自分たちの宗教の偉大さを訴えることに飽き足らず、イエスは、父なる神がこの世を救うために、地上に送り込んだ唯一の「神の息子」であると主張している。この排他性は、仏陀のような一人の人間がイエスと同様に、精神的・道徳的に美しく崇高な品格を獲得していることを考慮すると、知的な人々にとっては認め難いものである。

また、神に対する態度がはつきりしないとか、神との直接的な結びつきを要求しなかったという理由だけで、仏陀を退けるのはさらに困難であった。仏教の否定は、キリスト教の受容を、人格神は比喩的で象徴的なイエスの父親であるばかりではなく、実在の父親であるという説の受容に依存させるものにした。そのような神を信じることの唯一の証明あるいは論拠は、「神に近づく者は、神が存在し、神を熱心に求める者に神が報いてくれることを信じなくてはならない」（ヘブル人への手紙、11-7）という前提であった。それは私たちが信仰生活を、神は存在して、御自分が知られることを望んでいる、と想定することによって始めなくてはならないことを意味した。この種類の信仰は、神の啓示、神が人類との意志の疎通を望むという不確かな仮説や、様々な聖人が神と神秘的な霊交をしたと誓ったという証拠によって最終的に吟味される。

さらに、人々を天国か地獄に送る前に許しを与え、息子のイエス・キリスト、預言者やキリスト教会（このキリスト教会は度々、いかなる方法で稼ごうが、昇天する時に教会に財産を残す者にはすべて天国行きを約束するが）の聖職者の推薦のみを受け入れる人格神は、原罪を信ずる者だけに存在すると仮定される神のように思われる。私には、人間が原罪を背負って生まれるという仮説は、キリスト教の倫理の根底をなすが、不愉快である。いかなる批判が、すべての人間の精神の問題を超越しているヴェーダの「絶対者ブラフマン」に向けられようと、ヒンドゥー教徒やとりわけ仏教徒の観念の中には、暗黒や闇に関するキリスト教の主張に対抗して、光や悟りへの固執がある。仏陀は最高の状態に達した時、悟りを開いた者になったが、キリスト教は最初から人間に卑しむべき悲惨な地位を運命として与えるように感じられた。

また、ヒンドゥー教を信じている者、あるいは繊細なインド思想に魅力を感じた者にとって、インドの人格神クリシュナや『バガバッド・ギーダ』にある彼の教えは、少なくとも聖

書の山上の垂訓と同程度に説得力があるように思われた。慈悲深い言葉である「疲れた者、重荷を背負う者は誰でも私のもとに来なさい」(マタイ, 11-28) の寛大さは、譲歩すれば『ギータ』の一節 (第12章, 5-6) にかかなり符合している：

「非顕現なる神に専念した人々の労苦は多大である…。それらの人々はすべての行為を私(神)に捧げ、私に専念して、ひたむきなヨガによって私を崇拜して瞑想する人々だ。ああアルジュナよ、それらの私に心を注ぐ者たちを、私は生と死の輪廻の海から引き上げよう。」

植民地、半植民地に滞在したキリスト教のミッシヨナリーの記録は、C.E. アンドルーズのような稀な例を除いて、ごく最近まで彼らが帝国主義の剣を追いかけながら、最果ての地まで十字架を運んだことに関する限り、不幸なものだった。

そのため、イエスの生涯の品格や美しさに崇拜の念が感じられるものの、ヒन्दゥー教徒として生まれ、年齢を重ねつつその信仰から逸脱した私にとって、キリスト教のような著しく不寛容な宗教に改宗することは、あまり意味の無いことのように思われた。無欲な奉仕を通して人格が向上するという観念には深く感銘したが、それは職務を通して貢献するというヒन्दゥーのバクティ(信愛)説を承認しただけのものである。私はキリスト教を単なる地獄の苦しみに対する保険組合と見なすほど愚かではない。しかし、神について最も偉大なものがその善であり慈悲であるのに、万難を排して神格を支持するために、預言者の多様で矛盾した意見を土台にしたような上物を飾り立てるほど防衛的な宗教は、私にとって何か欠落していたように思われた。

つづく